

サキちゃん。サキさん。

なんて呼んだらいいのかな。君はぼくより年上だったから本来ならさん付けするべきかな。あの場所で一度も君の名前を呼ばなかったから、もしかしたら今ここでさん付けで呼んだから笑うかもしれない。

あ、えっと、なんでこの手紙を今書いているのかというと、ぼくはサキさんにあこがれを持ったからです。小学生の僕にとって中学生は手の届かない場所にいるというか、永遠に追いつかない場所にいるというか、そんな感じがしました。言葉にするにはあいまいとしてるけど、本当にそう感じたんです。

好きなものがあるの？ とサキさんが質問して読書とぼくが答えた時、すごいねって言ってくれてすごくうれしかったです。ぼくの親は、正確に言うとお母さんだけど、あまり読書することに賛成してないから。なんだか心が温かくなりました。あ、でも謝らなきゃいけないこともあって、こんなこと言うと笑われそうだけど、尊敬の意味が僕まだよくわかってなくて「ありがとう」って返してしまいました。辞書で調べると『その人の人格を尊いものと認めて敬うこと』と書いてあったんだけど、やっぱり意味はよく分かりませんでした。いつか分かる日がくるのかな。

何かほかにも書こうと思ってたんだけど、なんだったつけ。あ、思い出したけど、こんなこと女の子に対して書いていいのかな。でも書かないと忘れちゃいそうだから書きます。これを読んだ時、怒らないでください。

サキさんの左目の下にあったほくろ、きれいでした。ほくろにきれいなんてあるかって思われるかもしれないけど、大人びたサキさんには似合いました。えっと、言葉にするにはむずかしいんだけど、大人に見えるサキさんをより大人にさせているというか。……さっきと書いてること変わらないか。でも、きれいだったのは本当です。

あと、もうひとつだけサキさんに伝えたいことがあって（いったい何個あるんだってツッコんでください）名前を言った時に上がった花火に照らされた時のサキさんの横顔、言葉にならないほど美しかったです。それが最初に書いたあこがれにつながっているんじゃないかって思っています。

サキさんがなんであの河川じきにいたのかわからないけど（たぶん、ヨーヨー持ってたから夏祭りに来たんだと思います。まちがっていたらごめんなさい）僕に話しかけてくれてありがとうございました。僕はあの河川じきで空をながめるのが習かんになっていて、今日も見に来

たんです。そして夏祭りがあったいて、少しびっくりしました。濃い青色とオレンジ色に染まる空はともきれいなので、サキさんもつらくなったら空を見てみてください。きっと、いやなことを忘れられると思います。あと、それを映す川や海も反射してきれいです。

最初の方、なんて呼んだらいいかわからなくて君って書いてるけど、後半はサキさんと呼んでいるので許してください。サキさんが僕のことを覚えてるかかわからないけど、僕にとって今日の出来事は一生の思い出です。またいつかサキさんに会えた時、この気持ちを伝えさせてください。その時には今よりたくさんの本を読んでサキさんをおどろかせたいなっています。サキさんはずっとぼくのあこがれです。

小学六年生 うたかわ かける より

\*\*\*

アスファルトの熱気が少し焼けた肌を刺激する。

空は嫌になるほどの青と入道雲が広がっていて、夏は嫌いだと改めて思う。僕の青春はこんなに青くない。むしろどの色にも属さない灰色だ。

「翔かけは卒業した後の進路ってどうするか決めてる？」

進路のことで進路指導室に呼び出された僕と中学から知り合いの諒りょうは帰路りようについていた。手に頭を組んで諒は僕に尋ねる。

「決まってるから呼び出されたんじゃない」

「面倒くさそうにため息をつく、諒は「だよな」と言って笑った。

諒は気楽そうに羨ましい。本当は進路が決まっているのに、わざわざ進路が決まってるのにわざわざ進路未定と書き呼び出しを食らったのだ。僕は彼のそういう人の為に犠牲になるのはよく分からない。人助けとでも思っているのだろうか。

それに対して僕は将来に対して何の希望も抱いていない。抱いていない、と断言すると嘘になるけれど、誰も小説家という夢に賛成してくれない。だから漠然とだけ無理なんだろうと思っっている。

いつかの日に誰かを描きたいと思ったけれど、一体誰に影響されてそれがどんな出来事だったのか思い出せない。一体、僕が描きたいと思った人物は誰なんだろう。

「おい、電車来たぞ。なにポーっと立ってるんだよ」

諒の言葉で我に返る。習慣になつていたせいか、僕は考え事をしながら改札を通り、電車を待つていたみたいだった。止まっている電車のドアの前で諒が僕に向かって手招きしている。早く乗らないと置いていくぞと言いたそうな顔で諒が電車に乗る。僕もそれに続けて電車に乗る。

この街は田舎だ。だから電車は基本的二両で、発車するときにはトラックのエンジンがかかったような大きな音がする。幼いときは車と同じようなエンジンがあるんだと本気で信じていた。

電車が発車し、最寄り駅の星街駅ほしまちへと向かう。僕と諒は四人掛けの座席の横にあるロングシートに座り、電車の外を流れる街の風景を眺める。

「なんで諒は進路決まってるのにわざと未定って書いたわけ？」

さつき浮かんだ疑問を諒に質問する。すると彼はまっすぐに僕の目を見て「友達だからに決まってるだろ」と肩を組んできた。そういう陽キャのようなテンションで接する諒はあまり好きじゃない。

「友達だからそんなことするの？」

友達というものが僕には分からなかった。諒はあくまで知り合いであつて友達ではないのに。その気持ちが顔に出たのか、諒は眉をひそめ、今日の翔なんかおかしいぞと言って再び笑った。そしてそのあと「あつ」と何かに気が付いたような声を出した。

「なんか暗いなんて思ったら、蛍光灯切れてるじゃん」

天井を見上げたまま諒が呟く。確認するように天井を見上げると、確かに僕らが座っている蛍光灯一本だけ切れており、その真下だけ薄暗くなっていた。

「……」

突然僕らが座っている座席の前から女性の声が聞こえてきた。声をした方に目を向けると、ノースリーブの白いワンピースを着た、髪が肩まで伸びている女の子が僕の方を見て微笑んでいた。

「こんにちは」

真正面に座っている女の子に対して僕は会釈をしながら挨拶をする。すると女の子は嬉しそうに微笑んだ。

「誰に言ってるの？」

それを見ていた諒が不思議そうな顔で僕を見ていた。

「いや、目の前に座っている女の子が挨拶してきたから」

そう言いながら僕は女の子を指差す。

「誰も居ないけど」

諒の顔が不思議そうな顔が怪訝そうな顔に変わった。この顔になるときは大抵僕のことを疑っている。

僕は目の前に座ったままの女の子に目線に移す。相変わらず彼女は微笑んだままこちらを見ている。

「進路のストレスで幻覚でも見てるんじゃないの？」

怪訝そうな声で言う諒の声に遅れて、最寄り駅に着くアナウンスが流れる。

「……そうかもしれない」

立ちながら僕はそう呟いて諒と一緒に電車を降りた。彼女が座っていた座席を見ると、彼女ははまだそこに座っていた。

進路指導室に呼び出される日も終わり、僕も本格的な夏休みに入った。

田舎の夏はたぶん都会よりも暑い。風は吹くけど生温いし、周りに田んぼがあるせいでムシムシする。

部屋の窓から見える青空と入道雲を見て夏だと思う。そして、あの女の子のことが脳裏に蘇る。

あの子は幽霊なのか。それとも僕自身が作り上げた幻覚なのか。

それが気になると夜も寝られなかった。だから彼女が何者なのか確かめるべく、汗で引っ付いた白いTシャツを脱いで、外に出られるような適当な服に着替える。と言っても風景が前後に印刷された白いTシャツと黒いズボンというラフな格好だけだ。

姉とお母さんに適当な嘘をついて外に出る。向かう先はもちろん彼女が現れた電車だ。

もし仮に彼女が幽霊だったとして、いつどこに現れるのだろうか。あの時は電車の中で出てきたけれど、ホームには出られないのだろうか。出られなかったとしたら、彼女はどうかやって現れて消えていくのだろうか。

彼女に対して様々な憶測を立てるけれど、これが当たっているかは分からない。

『なんか暗いなって思ったら、蛍光灯切れてるじゃん』

歩きながら不意に諒が言った言葉を思い出した。

もしかしたら彼女は蛍光灯が切れている電車の中にいるかもしれない。

星街駅に着き、改札を通過して電車が止まっているホームへと向かう。しかしそう簡単に蛍光灯が切れている車両を見つけることは出来ない。

分かってはいたけれど、実際に予想していたことが目の前で起きるとなんだか落胆してしまう。とりあえず乗らないことには始まらないとホームに止まっていた電車に乗り、彼女が現れたロングシートに座る。

少し冷えすぎた車両に扇風機が回転している。その横で車両を照らしている蛍光灯を見るが、どこも切れていなかった。

やっぱりそう簡単にはいかないよな。

そんなことを考えながら天井を眺めていると、「こんにちは」とあの時と同じ女の子の声があった。突然の挨拶に僕は思わず飛び跳ねてしまう。その姿を見た女の子は一瞬だけ驚いたような顔をし、肩を小さく震わせながら笑った。

「そんなに驚かなくてもいいじゃん」

挨拶以外の言葉を初めて聞いた。包容力のある声で、でもどこかで聞いたことあるような声だった。

「……君は、あの電車じゃなくても現れるの？」

頭が混乱して、質問する順番を間違えた。まず最初に聞かなきゃいけないのは電車のことじゃなくて幽霊かどうかなのに。

「まあ、そうだね。私、電車に囚われた地縛霊だから」

彼女は僕の心が読めているのか、僕が答えてほしかった返答をしてくれた。そして地縛霊になった自分を嘲笑うかのように言った。

「電車に囚われてるって、何か未練みたいなのがあったの？」

地縛霊についてあまり詳しくないけれど、幽霊になる者は大抵この世に未練があると言われる。彼女にもこの世でやり残したことがあるのだろうか。

「私ね、海が見たかったの」

そう言いながら向かい側のロングシートに座り、僕の背後に広がっている風景を優しい眼差しで見つめた。

「中学二年生の時にガンが見つかって入退院を繰り返していたんだけど、高校三年生の時に死んじゃって。その時に見たかったのが電車から見える海だったんだけど、叶わなかった」

叶わなかった。その言葉がとてつもなく悲しそうで、僕は声が詰まった。たぶん僕には分か

らないほどの絶望だったんだろうと、漠然だけど感じる。

「……なら、その海見に行こうよ」

目の前に座っている彼女がビックリした顔をして僕の顔を見た。僕は彼女の目をじっと見つめる。

この世界にやり残したことがあるからここに現れたのに、それをやらずに彷徨うということは僕には辛すぎるし、耐えられない。

だから、僕が彼女の夢を叶える。

「その夢、叶えよう」

そうやって僕が立ち上がると、彼女も立ち上がって嬉しそうに頷いた。

その日から僕の生活は一変した。

もともとニートのようなだらけた生活ではなかったけれど、身だしなみには気を遣うようになったし、何より変わったのは彼女の為に電車に乗る回数が多くなったということだ。

電車に乗るからと言って彼女の願いが叶えられるかということとはできないのだけれど、仲を深めないことには何も始まらないと感じた。

そして分かったことがもうひとつ。彼女の名前はサキというらしい。彼女曰く、生前と名前は変わってないらしい。なんでそれが幽霊の彼女が分かるのかは謎だけれど、僕は彼女のことをサキさんと呼んでいる。特に理由はないけれど、さん付けの方がしっくりくるからだ。その呼び方にサキさん自身も「そっちの方がいい」と言って喜んでくれている。

サキさんと出会って二週間が経とうとした頃、暑さもより厳しくなっていた。

照りつける日差しから逃げるように向かったのは、コンビニのファミリーマートだった。

自動ドアが開くと、冷気が身体を包み込む。夏が嫌いな僕は秋になるまでここに居たいと思いながら、僕はアイス売り場にまっすぐ向かった。

今日はどれにしようと思い、結局いつもと買うブラックモンブランを手に持ち、レジを通して再び外に出る。気温が高い日にコンビニ立ち寄り、買ったものをレジ袋に入れて歩くのは嫌じゃない。

ファミリーマートの後に行き先は決まっていた。サキさんが待つ駅の電車だ。

距離はそれほど遠くなく歩いて五分くらいで着くけれど、暑さのせいで体感十五分くらいのように感じる。でも、彼女に会う為なら夏の暑さなんてどうでもいいように思うてく

る。好きな人に会いに行くならどんなに遠かったり疲れていたりしても会いに行くような、そんな感じだ。

彼女と知り合ったのはこんな風に日差しが照りつける暑い夏の日だったことを歩きながらふと思いつく。

星街駅に着いて切符を買って改札を通る。

二番ホームで立って待っていると、サキさんが乗っているであろう電車が止まった。どの電車に乗っているかは分からないけれど、大抵彼女は車両が二両で人の乗車が少ない、二両目の車両のドアの入り口の横にある椅子のところに現れることがほとんどだ。

乗り換えの駅ということもあり、車両に乗っていた人が次々に降り、電車の中は誰も居なくなった。少しホームより高い位置にある電車の出入り口に右足を踏みしめて、車両の中に入る。中に入れば少し効きすぎている冷房が入っていた。ドアの横には車両側壁に沿って設置してある五人用のロングシートがあり、そのすぐ横には二人分の座席が向かい合わせになっているボックスシートが十個ほど設置されている。サキさんが出てくるのはボックスシートの横にあるロングシートだ。僕は定位置になっているロングシートの端に座り、暑さのせいであっさり結露したビニール袋を膝の上に置く。

「久しぶり」

聞き馴染みのある優しい声があった。顔を上げると目の前にはいつもと変わらない白いノースリーブのワンピースを着たサキさんがそこに立っている。

「珍しいね、こんな真っ昼間にくるなんて」

嬉しいよ、と言いながら僕の左横に腰掛ける。

「夏休みだから、暇だし」

ビニール袋に入ったブラックモンブランの袋を取り出す。ビニール袋よりアイスの方が結露していて、袋を触っている自分の手先も同じように濡れていく。

「あ、そのアイス！」

サキさんはアイスの存在に気づいた途端、子どもがはしゃぐような声を出した。

「好きって言ったの覚えていてくれたの？」

ブラックモンブランを買って来てくれたことがよほど嬉しかったのか、彼女はそこで足をパタパタと小さい子どものように音を立てた。

「電車の中で食べるのは少し抵抗あるけど、一回くらいならいいかなって」

この前サキと好きな食べ物の話をした時に彼女の好きな食べ物を知ったので買ってこようと思っただのだ。

それにこの時間帯の電車は一時間くらいこの駅に停車しているはずだ。アイスを食べるだけなら、十分すぎるくらい時間がある。

「翔くんは優しいんだね」

そう言ってサキさんは微笑む。

「でも、私食べられないから二つとも食べていいよ」

「食べられない？」

予想外の出来事に思わず疑問の言葉が飛び出る。

「……それって幽霊だから？」

多分当たっているであろう予想をサキさんに投げかける。すると彼女は「正解」と両手で輪を作って大きな丸を表した。どうやら僕の予想は当たっていたようだ。

「じゃあなんであの時、目輝かせてたの？」

「そりゃあ、食べたかったから」

「答えになってないよ」

笑いながら僕は結露したブラックモンブランの袋を縦に切り、冷たいアイスを取り出す。結露が思ったより早かったから形が崩れているのではないかと心配したけれど、多少雫が垂れているだけで思ったより溶けてはなかった。

持ち手の棒から伝わってくるアイスの冷たさを感じながら、ブラックモンブランを口に運ぶ。チョコレートとバニラの二種類の味が口の中に広がり、なんだか懐かしい気持ちになった。口の中でパリパリとアイスが砕け、十回ほど噛むとアイスは個体から液体へと変化した。チョコレートとバニラがうまい具合に合わさった液体が喉を通っていく。

「美味しい？」

サキが羨ましそうに僕の顔を覗き込む。

「うん。シンプルイズベストって感じ」

「なにそれ。何かもうちょっとあるでしょ」

私食べられないんだからちゃんとした食レポしてよーと僕を指さしながらケラケラと笑う。

その笑顔、どこかで見たことあるような気がする。

いつだっけ、とブラックモンブランを食べながら考えていると、サキが「将来の夢ってある



の？」と顔を覗かせてきた。突然自分の視界にサキが入ってきたのでびっくりする。

「……一応、小説家」

小さく答えると「一応ってなに」とサキは少しだけ不機嫌になった。

「……いや、なりたい理由はちゃんとあるよ」

一口だけ残ったアイスを口に放り込み、咀嚼し、それと同時に言えなかったことを頭の中に思い浮かべる。そして、飲み込む。

「僕は本を読むのが好きだし、本に勇気を貰ったから今度は僕が勇気を与えたい側になりたいんだけど、親が賛成しないんだよ」

小学生の頃から本を読んでいた僕は、日常的に本があった。そしていつの日か物語を生み出す小説家になりたいと思うようになった。それをお母さんに伝えると、「そんなものなれるわけがないじゃない」と真っ向から否定された。

この世の中には溢れんばかりの職業があって、自分のやりたいことが見つからずに死んでいく人もいる。そんな目が回るほどある職業の中で僕は自分のやりたいことを見つけた。でもお母さんは僕が小説家になる夢を否定した。大黒柱のような存在のお母さんにそんなことを言われると、誰だって諦めるに決まっている。

目の前が涙で少しだけ滲んだ時、「親のせいにするんだ」と今まで聞いたことのない冷たい声が横から聞こえた。その声がサキさんだと理解するには少し時間がかかって、同時に混乱した。

聞いたことのない声で不安になった僕は恐る恐るサキの顔を見る。すると彼女は僕と目が合った途端「あ、ごめん、びっくりしたよね」と言っって両手を振った。その両手は何を意味するのだろうか。

「翔くんっていま何年生？」

「……高三だけど」

学年を聞いて何か彼女に得ることがあるのだろうか。そう思いながら答えると、サキさんは目を泳がせながら言葉を選ぶように言った。

「高三でも、まだ多分なりたいものって見つかると思うから、頑張っって」

僕の顔を見てガッツポーズしたサキさんの笑顔はどこかぎこちなかった。

「うん、ありがとう」

僕が頷いた時、ホームから電車が発車するアナウンスが聞こえた。

「もうすぐ発車するみたいだから、僕そろそろ帰るね」

「うん、気を付けてね」

彼女の言葉を背に僕は電車を降りる。スマホを見るとちょうど一時間経っていた。

僕が電車の前で振り返るとちょうど電車のドアが閉まり、発車していった。

彼女の姿は窓の反射のせいでよく見えなかったけれど、空はさっきより雲が多くなっていた。

映画でよく見る真っ白の雲じゃなく、雨雲のような灰色の雲が空を覆っていた。この雨がもし雨雲なら、もう少し経ったとき雨が降り出すかもしれない。降り始める前に早く帰ろう。

早足で家に帰り、台所で手を洗う。結局、サキさんの為に買ったブラックモンブランは食べなかった。冷房が効いていたとはいえ、結露はしていないから多分もうドロドロに溶けているだろう。そんなアイスを食べる気にはなれなかった。

冷凍庫にアイスを放り込み、僕は部屋に行きベッドに横になる。

この悶々とした気持ちをどう表したらいいのか分からなかった。目を閉じればぎこちなく笑っているサキさんの顔が脳裏に蘇ってくる。

その日は何もする気が起きなくて、僕はそのまま眠りについた。

窓が風でガタガタと鳴る音で目が覚め、壁にかかっている時計を見ると朝の十時を回っていた。普段、十時に起きることなんてほとんどないから多分疲れていたのだろう。

一階に降りて、冷凍庫に入っていたブラックモンブランの袋を開けて口に入れる。昨日の予想は当たっていて、アイスは溶けていて原型がほとんど残っていない状態で冷凍されていた。

アンバランスな味と形に思わず顔をしかめる。ブラックモンブランを食べながら台所にある流しに寄り掛かって誰も居ない居間を眺める。居間なのになぜか床に畳が敷かれ、その上にはちゃぶ台、テレビ、タンスが置いてある。

アイスを何口か口に運んだ時びっくりしたよねと言って手を振り、ぎこちなくガッツポーズをした彼女の姿が脳裏に蘇ってきた。

一日経って今でも、あの言葉と言動の意味が分からなかった。あれはプラスに捉えることもできるし、マイナスに捉えることもできる。仮にプラスだった場合、あの言動は裏を返さず受け取ることができ、彼女は僕を応援してくれていることになる。逆にマイナスだった場合、本心を隠して僕に言葉を発したことになる。現時点でどっちの可能性もあり、今の自分はマイナスだった場合を想定しているけれど、今まで接してきた彼女の言動を思い出してみるとプラスだったような気もする。

もしかしたらそれは自分の考えすぎかもしれない。だったら、会いに行って確かめるしかない。

だとすればブラックモンブランを食べている場合ではない。二口サイズのアイスを口に頬張る。急いで二階に戻って身支度をし、黒いTシャツとジーパンに着替え、財布と家の鍵を持って家を出る。昨日と変わらず厚い灰色の雲が空を覆っていたけれど、急いで行けば雨はしるはずだ。

小走りで星街駅へと向かい、改札を通りホームへと向かう。しかし十一時という中途半端な時間帯のせいでホームに電車は止まっていなかった。

田舎だからしょうがないと、茶色の五人掛けの椅子に座って電車を待つ。電車が来ないことはよくあることだけれど、サキさんと出会ってから電車がホームに止まってないことはなかった。時間の潰し方が分からなかった。スマホのロックを解除してSNSを開いてみるも、すぐに飽きてしまう。空を観察しようにも厚い雲が空を覆っているせいで何の面白みもない。

足を伸ばし背もたれに背中を預けながら遠くに見える山を眺めていると、電車が来るアナウンスが聞こえた。

サキさんに会える。

そう思って立ち上がり、電車のドアが開くのを待つ。中に入ると相変わらず効きすぎた冷房が身体を包み込む。

定位置の座席に座ればいつものように現れてくれると思っていた。でもサキさんは十分経っても一時間経っても日が傾きかけても姿を現さなかった。もちろん途中で電車を変えてみたけれど、結果は同じだった。

もしかして成仏したんじゃないのだろうか。

そんな考えが頭の中に浮かぶが、そんな前兆はひとつもなかったと首を振る。

仮に成仏したとして、こんなにも頻繁に会っているのだ。何も言わずに消えるわけがない。それに、彼女の未練だった海もまだ見れていない。だから成仏するにはまだ早すぎるのだ。

原因は何だと考え、すぐに昨日の出来事だということに気がつく。それに気がついた瞬間、漠然とした不安が心を支配した。

でももしかしたらたまたま今日現れなかっただけかもしれない。

そう思って翌日も電車に向かったけれど、サキさんは現れなかった。そうなるこれは僕の勘違いじゃなく、彼女の意図的なものになる。

自分の中に住み着いている不安がますます大きくなっていく。

家に着き、自分の部屋のベッドで横になる。

『親のせいにするんだ』

初めて聞いた彼女の冷めたような声。あれはきつと本心だ。両手で手を振ったのは、自分が言った本心を悟られないようにするため。そんなこと考えたらすぐに分かるのに、なんであの時自分の考えすぎかもしれないと思ったのだろう。自分の浅はかな考えに思わずため息が出る。

何か外から大きな音がすることに気が付き、音がしている窓を見ると激しく降っている雨が窓を打ち付けていた。こんな気分が沈んでいる時は部屋に秒針の音だけ響けばいいのに。普段気にならない音が耳に入ってくると、余計に考えていることが分からなくなって惨めになってくる。サキさんが居なくなつて初めて彼女の偉大さを知った。気付かないうちに僕の生活は彼女を中心に動いていたことに今になって気が付く。

もう彼女に会えないと思うと生きる気力が徐々に失われていく。生きていく心地がしなないと、はまさにこういうことなのだろう。

こうなるともう起き上がる、顔を洗う、階段を降りてご飯を食べる、勉強をするという、今までなんとも感じてなかった行動すべてが億劫になった。

でもなぜか、ベッドの前にある机がいつも以上に汚く感じて、掃除をすることにした。重い身体を起こし、机の上にあるものを整理していく。

テスト範囲で配られたプリントや教科書が机の上に無造作に置かれていて、どうして自分は今まで掃除をしてこなかったんだと後悔する。そして机の上が片付いた後、机の下にある引き出しも整理することにした。

一番下にある教科書類を入れる引き出しを開け、教科書や予備でとっているクリアファイルを全て取り出した時、水色の封筒があることに気がついた。

表には何も書かれておらず、裏には『小学六年生 うたかわ かける より』と力強い丸文字で書かれていた。

こんな手紙、書いた記憶がない。

眉をひそめながら白い花のシールを剥がし、手紙の中身を読む。それは三枚にわたって当時の思いが綴られていた。

その時、なぜ彼女の笑顔に見覚えがあったのか、初めて彼女に会った日「はじめまして」ではなく「こんにちは」と声を掛けられたのか。

彼女は、サキさんはあの夏祭りの時に既に会っていたからだ。

僕の中で点が線になって繋がった。

僕は勢いよく立ち上がり靴を履いて、全速力で星街駅へと向かう。肺が痛い。足ももつれそう。でも、走る。彼女は待っている。僕を、待っている。

改札を通り、ホームに向かういつものように電車が止まっていた。限界を超えた足が疲れ切って動かなくなる前に僕は急いで電車へと乗り込む。ロングシートに倒れ込んで息を整えていると、すつと優しい香りが鼻腔を刺激した。顔を上げると、サキさんが立っていた。

「分かったんだね。私が現れなかった理由」

僕は息を整えながら頷く。すると彼女は笑顔になっていつもと同じように指を指して僕を笑った。

「理由が分かったとはいえ、そんなに血相変えて走ってこなくてもいいでしょ」

ツポにはまったのか過呼吸になっていくサキさん。その姿が新鮮で、でもどこか懐かしくて僕もつられて笑ってしまう。

「どうしてわかったの？ 私が現れなかった理由」

今度はサキが呼吸を整えながら僕に質問をする。

椅子に座り直すと、サキは僕の隣に座った。少し緊張したけれど、そこには安心感があった。

「見つけたんだよ、サキさんに宛てた手紙を書いたもの。色褪せてたけど、そこにはちゃんと思い出が残ってた」

全力疾走したせいで紙はぐしゃぐしゃになっていたけれど、中身はしっかりと読むことが出来た。その手紙をサキさんに手渡す。手紙を読んだ彼女は嬉しそうに笑った。

「海、見に行こう」

そう言って僕らは電車が発車するのを待った。

サキさんは周りの人には見えない。それが幽霊だということを意味することは解っていた。

でも彼女は僕の前に確かに存在していた。そんな彼女に縋るのは、きつと僕は彼女に依存していたんだと思う。

僕と彼女の前にはエメラルドグリーンの海と澄み切った青空が広がっている。それは車両とこの空間に縛られた彼女がずっと待ち望んでいた風景だった。

「綺麗だね」

横にいるサキが嬉しそうに呟く。爽やかな風に吹かれ、短い髪と白いワンピースが緩やかに

靡いていた。それさえも美しく思えて、僕は自然と笑顔になる。

「ずっと、この景色を見たかった」

今までの出来事を思い出すような優しい声でサキさんは言った。

「この海を見るのが翔くんによかったよ」

そう言って彼女は海を見ながら微笑んだ。

「もしこの景色を見るのが翔くんじゃなければ、私もしかしたら死んでたかもしれない」

大きく息を吸い込むと、サキさんは一歩ずつ砂浜に足跡をつけるようにゆっくりと歩き出した。僕もそのあとに続く。

既に亡くなっている人が死んでいるという言葉を使うと、なんだかそれは逆に死んでいる者も生きているような錯覚に陥って、不思議な感覚になる。でもそんなことはない、笑いが込み上げてくる。

「もう君はこの世にはいないのに、もう一度死ぬなんてありえないよ」

「確かにそうかもしれない」

数歩先を歩くサキさんに追いついて顔を覗き込むと、彼女は何かを思い出すような優しい顔をして笑っていた。でもそのあとすぐに「死んでないから地縛霊になってるんじゃない？」と思い出したかのように口にした。僕は彼女の言う通りだと思って「確かにそうかも」と、ついさっき彼女が言った言葉を繰り返していることに言った後に気が付いた。

そのことにサキさんも気づいたのか、彼女の顔を見るとすぐに目が合った。そしてその瞬間が面白くて僕らは声を出して笑い合った。

「なんで翔くん私と同じこと言うの」

「だって、僕もそう思ったから」

「そんなこと言われなくても知ってる」

「なにそれ」

波打ち際まで来たところでサキは足を止めて、手を後ろに組んで再び笑った。

「水、冷たいね」

そう呟いた彼女の声は少しだけ寂しそうだった。

「僕はずっと、君に懂れてた」

水に打たれながら、彼女はじっと自分の足を見ている。

「出会ったあの日、僕は花火に照らされた君の横顔が綺麗だと思った。そしてそれと同時に強

い憧れを抱いた」

一度深く深呼吸して、再び僕は口を開く。

「きっと僕はその時から君を言葉にしたかった。思い出で終わらせたくなかったんだと思う」  
そう言ってサキさんの顔を見る。彼女も僕の顔を見ていて自然と目が合う。そして笑う。

「私って、そんなにすごかったんだね」

その言葉の意味がよく分からなかった。でも、彼女は嬉しそうに微笑んだ。きっと彼女も僕の存在は大きかったんだと思う。

青春なんて言葉があるけれど、それは一部の限られた人生を謳歌したい人達が使う言葉だと思っていた。

でも僕が体験したこの出来事も立派な青春だと、今なら胸を張って言える。

「絶対に君を言葉にするから。思い出だけで終わらせない」

それは彼女に送る最後の言葉でもあったし、自分への決意の言葉でもあった。

「楽しみにしてるね。翔くんの小説」

そう言いながら海を眺める彼女の横顔は、あの日と同じように言葉がいらぬほど美しかった。

\*\*\*

彼を見た時、小さい男の子だと思った。儂い目をしていて今にも消えそうだったのに、目の奥には確かな情熱を感じた。

それは七年後も変わらずに、生き続けていた。

「こんにちは」

電車の中で声を掛けると、彼はあの日と同じように驚いた表情を見せた。それが可笑しくてつい笑ってしまったけれど、彼はなぜか困った顔をしていた。視線を横に移すと友達らしき人が「見えない」と言っている。その時私は自分が幽霊なんだということに自覚した。

二人が電車を降りた後、自分も外に出ようと試みたけれど、なぜか出られなかった。ドアは確実に開いているのに見えない檻に囲まれているような、そんな感覚だった。でも出られないのはなんとなく心当たりがあった。

自分が幽霊になる前、走馬灯を見た。多分、あの時はまだ生きていた。その時、彼と見た川

に繋がる海が映し出されたのだ。

私は、あの川に続く海が見たい。

そう思って地縛霊になったのだと納得した。

数日後、私は気が付いたら電車の椅子に座っていた。どうしてここに居るのか分からず、車両の中をフラフラと歩いていると、ロングシートに座っている人影が見えた。

もしかして、彼が現れる時だけ電車に現れることが出来るんじゃないか。

喜びで宙に浮きそうなくらいのワクワク感に包まれながら声を掛けると、あの時と同じように彼は体をびくつかせて驚いた。その反応が面白くて、私は指差して笑う。

どの電車でも現れるのかという質問に自虐的に答えると、彼は不思議そうに未練があるのかと聞いてきたので「海が見たかった」といういつかの願望を話した。

正直、話したい気持ちと話したくない気持ちが半々だった。でもまさか「海に行こう」と私の願いを叶えてくれると思っていなかったのが驚いた。手を差し出した彼の眼はあの時と同じように真っ直ぐで、今すぐにもありがとうと言って抱きしめたかったけれど、彼を困らせると思ったからそれはやめた。

翌日から私は気が付いたら電車に座っていて、車両を歩くと必ず翔くんが居た。その度に私は嬉しくなって、いつの間にか彼が居る日常が当たり前になっていった。

ある日、真昼に目が覚めた。こんな時間帯に翔くんが来ることは珍しくて、何か特別なことがあるんじゃないかとワクワクしていた。予想通りそのワクワクは当たっていて、私が好きだと言ったブラックモンブランを買って来ていた。

「電車の中で食べるのは少し抵抗あるけど、一回くらいならいいかなって」

アイスを袋から取り出しながら恥ずかしそうに言う彼は、あの時と変わらず優しくかった。

美味しそうにブラックモンブランを食べる翔くんを見て、そういえば彼の夢を聞いていないことに気が付いた。夢があるか尋ねると、彼は不安そうな顔をして「一応、小説家」と言った。

本が好きだと目を輝かせていた彼が小説家を目指す。

その事は誇らしいことなのに、「一応」と言った。夢に一応も何もないはずなのに。

「一応ってなに」

わざと不機嫌になったフリをして彼に尋ねると、今度は迷った表情で「理由はある」と言い、ひと口サイズのアイスを口に入れて、飲み込んだ後「今度は僕が勇気を与えたい側になりたいんだけど、親が賛成しないんだよ」と不機嫌そうに言った。



正直、よく分からなかった。

自分のやりたい夢があるなら、どれだけ反対されようと突き進んでほしい。周りの意見なんて関係ない。あの時の彼は、夢はなかったけれど物事を真っ直ぐにやり遂げる目をしていた。なのに、親のせいにして自分の可能性を否定している。そんなことは許せなかった。

「親のせいにするんだ」

気が付けば私はそう口にしていた。自分でもこんな声が出せるんだと驚いた。でもその声に驚いているのは彼も同じだったらしく、目が少しだけ潤んでいる。

取り返しのつかないことをしたと、私は慌てて謝って両手を振って否定したけれど、目の潤いが消えることはなかった。

「高三でも、まだ多分なりたいものって見つかると思うから、頑張って」

混乱して在り来たりなことを口にしてしまったことを後悔する。そろそろ帰るねと言った彼の顔は今にも泣きそうだった。

それから私は電車の中で座っていることはなく、代わりに居たのは真っ暗闇の中だった。死んでいるのに、私はもう一度苦しまなきゃいけないのかと思うと、胸がギュッと閉め詰められた。

暗闇の中は何もなかった。一寸の光もなく、動き出せばもとの場所には戻れそうもなかった。なので、私はそこから一ミリも動かず、ずっと膝を抱えて蹲っていた。

何日経ったか分からなくなってきた頃、暗闇が徐々に光を帯びてきて視界が開けてきた。真っ白な世界に私がひとりだけ座っている。そして私の前にはあの時出会った翔くんが机に向かって何か書いている姿が目に入った。

私はゆっくり立ち上がり、手紙の内容をそっと覗き込む。彼の字は私の想像よりも丸っこくて、でもどこか優しさがあつた。

『濃い青色とオレンジ色に染まる空はとてもきれいなので、サキさんもつらくなったら空を見てください。きっと、いやなことを忘れられると思います』

最後の方に書かれている文章に目が留まった。不意に目線を上げると、彼が書いている通り群青色と茜色の二色に染まった空間が広がっていた。きっと彼は、この空が誰よりも好きだったんだろう。

目を閉じて開けた時、私は電車の座席に座っていた。

翔くんに見える。

驚きと楽しみと不安が一気に押し寄せてきて、今すぐにでも叫び出したかったけれど、その衝動に駆られる前にロングシートに倒れ込む彼を見つけた。冷静を装って彼に近付くと、彼は嬉しそうな顔をした。多分、その顔は無意識だったと思う。息が上がっているところを見る限り、全力疾走してきたことが想像出来た。その姿を想像すると面白くてついツボにはまってしまった。

「見つけたんだよ、サキに宛てた手紙を書いたもの」

そう言って彼は私に色褪せた手紙を手渡してきた。

その手紙はさっき私が不思議な空間で見た手紙と一緒にだった。中身を見て確認すると、内容もやっぱり一緒だった。

「海、見に行こう」

その言葉に私は満面の笑みで頷いた。

電車に揺られて、私が夢に見た海が目の前に広がっていた。

電車が止まり、ドアが開く。彼が降りた後に続こうと私も右足を踏み出す。そこには見えないう檻はなく、ずっと降りることが出来た。嬉しかったけれど、出られたということは私の命はもう長くない。

浜辺に降りた私たちは、一時海を眺めていた。

「綺麗だね」

そう言って彼の横顔をバレないように見る。あの時とは違う、骨格がしっかりとした男の子になっていた。

「もしこの景色を見るのが翔くんじゃなければ、私もしかしたら死んでたかもしれない」

冗談で言った言葉に、彼は「もう君はこの世にはいないのに、もう一度死ぬなんてありえないよ」と笑った。

そうでありたかった。病気で死なずに生きていたら私は現在いまと変わらず彼の横に居られただろうか。

波打ち際に来た時、水が冷たく感じた。さっきまで暑さも冷たさも感じなかったのに感じるようになってきたということは、もうすぐ私はこの世界から居なくなる。

死ぬのが怖いと言ったら君は笑うだろうか。

でもその不安を拭うように「僕はその時から君を言葉にしたかった。思い出で終わらせたくなかったんだと思う」と彼は真っ直ぐな目をして言った。

その時私は死なないと確信した。この世界に居る人達が私のことを忘れたとしても彼さえ私のことを覚えていれば、私は死なないし死ぬことは出来ない。

「私って、そんなにすごかったんだね」

私は死んでも生きれる術を得た。そう思うと、目の前に迫りくる死に対して少しだけ強くなる気がした。

「絶対に君を言葉にするから。思い出だけで終わらせない」

その言葉に涙が出そうだった。私が生きた世界を書いてくれるなら、私はこれ以上の願いはない。

「楽しみにしてるね。翔くんの小説」

私はあの時、一人で居る彼がどこか消えてしまいうだから話し掛けた。でも彼はあの時既に自分の好きなことを見つけていたのだ。

そして今、私が好きな景色を彼も眺めている。この景色が彼にとって大切なモノになるように、私は目の前に広がる海を精一杯目に焼き付けた。